

ルネサンス新思想

講演では、アン教授が流ちょうな日本語を話すことに驚かされた。それまでもは、アン教授は大阪生まれの在日コリアン3世。東大博士課程を修了し、東海大助教などを経て95年からカリフォルニア大バークレー校で教鞭をとっている。

アン教授はまず、米国の使用済み核燃料の処理・処分政策について説明した。使用済み核燃料を再処理せずに埋め立てる直接処分の方針は、核拡散リスクの抑止、将来の原子力利用拡

大の障害除去をねらいに決定された。しかし、現状では中間貯蔵が進めば、それほど直接処分を急ぐ必要はないとの雰囲気。将来世代の選択肢を温存しながら、安全に管理する方針に移っている。

ただ、米国は民生用再処理施設がない上、直接処分場となるユッカマウンテン

サイト

sight 2009

先月の日本原子力学会「09年春の年会」で興味深い講演があった。米カリフォルニア大バークレー校のアン・ジョンソン教授の講演だ。演題は「原子力統合戦略の考え方―将来に向けて今なすべきこと」。アン教授は「原子力ルネサンスはモノの開発ではない。新しい思想の構築

だ」と訴えた。新思想の中核は「Deontological」という聞き慣れない言葉。ビジネス倫理と関連し、「義務論的」という意味をもつようだ。日本に対し、この義務論的な考え方に基づいて社会的な合意形成の過程を確立するよう提言している。(篠岡 純一)

合意形成の過程こそ重要

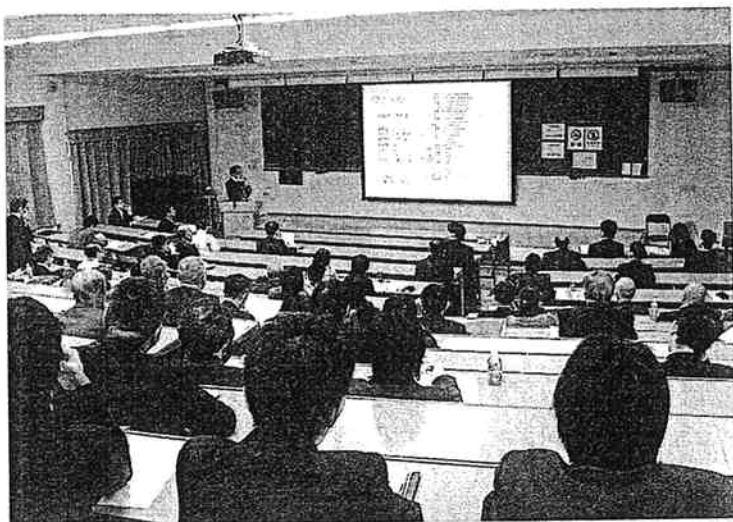
計画が政権交代に伴い、中断に追い込まれた。アン教授は処分場の必要性に触れながらも「地元が判断に与できない制度であることが致命的」と指摘する。ある会合で「猛毒入りのカプセルがあり、そのカプセルが絶対に安全とはいえず、飲み込めるか」と質問され、使用済み核燃料の潜在的有毒性を重視する地元の気持ちを理解できたという。

こうした文脈からアン教授は「義務論的」の考え方に言及した。倫理的な判断の基本に「原理原則」「義務の意識」を据える考えだ。功利主義は「最大多数の最大幸福」の結果を求めるのに対し、義務論的な考え方は過程を重視。①将来

技術偏重より「聞き手」に

世代への責任②途上国との公平性③不利益をこうむる地域との公平性④政策決定過程―に倫理性を見いだす。

たとえば日本のエネルギー政策では、行政や電力会社が持続的に原子力を推進し、現時点では結果として、エネルギー安全保障や気候変動抑止の観点から、最大



アン教授をはじめ、興味深い講演が多かった春の年会

多数の最大幸福が導かれた判断だったといえるのだろう。しかし、原子力施設の立地過程には問題を抱え、高レベル放射性廃棄物の地層処分候補地探しの難航に、その問題が端的に引き継がれている。

アン教授は、使用済み核燃料の処理・処分分野では「義務論的」な考え方が

重要と訴える。そのうえで「原子力ルネサンスは新しい思想の構築。新しい思想は社会的な合意形成の過程から生まれる」と主張。「なぜ原子力が必要なのか、廃棄物や核拡散などの困難を抱えてでも進める動機はどこにあるのか、こうした点について、いまこそ国民的決着をつけなければならぬ」と話した。国民的決着に向けては、環境リスク、経済性、安全保障の観点から原子力を定量的評価し、判断材料として国民に示すことを提唱する。

国民的合意を得るためには、功利主義に基づく技術至上主義に陥るのではなく、まずはよき「聞き手」として、社会が求めるものに耳を傾けることが必要だ」という。アン教授は「日本が新しい思想を固めれば、国際的なリーダーシップが生じるうえ、土気の高い人材が育つ大きなチャンスになり得る」と講演をまとめた。会場から大きな拍手を浴びていた。